

# 大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会（第2回） 議事概要

## 1. 検討会の概要

日 時：平成27年7月22日（水）13:00～15:00

場 所：中央合同庁舎第8号館4階 407-2会議室

（出席者：御厨座長、目黒副座長、尾崎、高野、吉見各委員、  
笹野氏（亀山委員代理）、柴山氏（今村委員代理）、沼田氏  
日原政策統括官、名波参事官、永井課長、森澤課長 他）

## 2. 議事概要

配布資料1から2、参考資料1について、沼田氏、目黒副座長、事務局及び国会図書館から説明が行われた後、各委員に御議論いただいた。

委員からの主な意見等は次のとおり。

- 災害時の行政データの標準化について、例えば統一フォーマットを作成し、迅速に報告できるようにするとか、ロスを小さくするとか、これは非常に重要なことだと思う。
- 過去の経験、例えば、集めていただいた石巻市のデータから、いろいろ勉強させていただくことは非常に有意義なことだと思う。いろんな形でオープンにみんなが勉強できるようなシステムを組み上げていただければと思う。
- 意思決定の結果、うまくいかなかった事例は、普通にアーカイブをただけでは出てこないもので、証言記録も普通にネット情報を収集しただけでは出てこない。かなり信頼関係がないと、ほとんど集まらないと考えられる。普通にウェブだけで集めることは難しい情報が一部あるということを知っておいていただいたほうが良い。
- 避難対応等で比較的うまくいった事例はよく出てくるが、うまくいかなかった事例を入手することはすごく難しい。失敗イコールマイナス査定みたいな環境があると、重要なだけれども出てこないという構造的な問題がある。
- システムでの「意思決定」の扱いが難しい。「意思決定」は決定したと判断したという自覚がある場合であり、様々な状況が進行している中では、いつの間にか別の状況に対応しているうち、結果的にそうってしまったみたいなどころもある。そのときは恐らくその記憶自体も、実は隠しているのではなくて、薄らいでいるのだと思う。間違っただにしても、そうでないにしても意思決定ができたという状況は、かなり明確にみんなが意思決定をしたということが言える客観的状況にあって、ある主観的な状況下では、それすらないまま、流れの中でそういうふうになってしまうことも考えら

れる。システムの整理上、この考え方を踏まえておくと、もう少し意思決定のプロセスがよく見えてくるのではないか。

- 災害対応というのは、毎回あるレベルの情報はきちんと残して、次にその自治体だけでなくオールジャパンで使えるような環境をつくって、蓄積させていくという仕組みをつくらないといけないのではないかと感じている。
- 記録のために記録するというのは、災害対応の現場ではかなり困難に感じる。情報共有の仕組みであるとか、いろんな仕組みの中で自動的に記録が蓄積されるという仕組みを考えていかなければいけない。極論すると、これをやったら便利だなという仕組みをつくると、コンピュータのシステムで自動的に記録が蓄積されていく、蓄積されたデータを後からゆっくり分析するという仕組みを造っていくことが重要だと思われる。
- 報告様式の統一ということがポイントになり、被害状況だけでなく、意思決定の中で重要なポイントとなるような点については、報告様式の中に初めから入れておいていただく、それをだんだん充実させていくという方法があるかもしれない。ただ、1つのシナリオにとらわれ過ぎてしまうという危険性もあるため、留意しておく必要があるが、報告様式イコールチェックリストみたいな形にできれば、相当程度のデータは集まるかもしれない。後でそのデータを検証、またはヒアリングをして、記録官、責任者みたいな人が表面上のデータをもとにその背景を記録していくという作業を一般化させれば、記録を残すことも可能ではないか。
- 平常時に使っていないシステムは、予行演習はするかもしれないが、実際、非常時にみんながきちんと使えるかという、使えないと思う。非常時に本当に役立てたいシステムは、日常のシステムとして使っているものでないと本当の意味で役に立たない。東日本大震災のときもTwitterやFacebookが役に立ったというのは、普段から使い方に習熟していたからだと思える。普段から使っているシステムを、災害時にうまく組み合わせて対応するような方向で検討すると、リアリティが増すと思う。

以上